

大正・昭和初期における家庭生活

—中国・四国地方での調査から—

末 広 菜 穂 子
石 田 美 清

I. はじめに

先に、中国・四国地方出身で、70歳以上の人々を対象として、子ども時代の生活を明らかにする目的で調査を実施した（以下、平成3年度調査と呼ぶ）。その結果、家族・世帯構造、日常の物質生活、家族関係、地域社会との関わり、学校生活など、大正・昭和初期の、子どもを取り巻く生活環境について明らかにした。そこでは、子どもの生活は、学校や地域社会よりも家庭を中心に展開されており、個々の家庭や周囲の実状に対応して多様に富んだものであることがうかがえた。⁽¹⁾

したがって、子どもの生活の全体像をとらえるには、当時の子どもが置かれていた家庭の生活をより具体的・詳細に把握する必要がある。そこで本調査では、平成3年度調査結果を踏まえ、調査対象地域および調査対象者の範囲を広げて、衣・食・住を中心とする基本的な家庭生活の実態を明らかにしようとした。

II. 調査方法

〔1〕調査方法

広島市内のHK大学学生および高松市内K大学学生に対して、調査の目的、調査の方法を説明した後、調査用紙を配布して、祖父母に対して、直

接面談して聞き取り調査を行うよう指示した。

調査用紙を回収後、中国・四国地方の出身者で、明治・大正生まれのものを選択し、有効回答とした。

有効回答は、HK大学は177票、K大学は132票で、合計309票であった。

〔2〕調査時期

調査用紙は平成4年7月13日(K大学)、7月15日(HK大学)に配布し、平成4年9月30日までにすべて回収した。

Ⅲ. 調査結果

〔1〕調査対象者の特色

1. 調査対象者の性別と年齢

表1に調査対象者の性別、表2に調査面談者との関係を示している。全体の74.1%が女性、25.9%が男性で、調査面談者との関係では、祖母が67.3%、祖父が22.7%となっている。

表1 性別 人(%)

男性	80(25.9%)
女性	229(74.1%)
合計	309

表2 調査面談者との関係 人(%)

祖母	208(67.3%)
祖父	70(22.7%)
おば	4(1.3%)
おじ	2(0.6%)
曾祖母	1(0.3%)
その他男性	8(2.6%)
その他女性	16(5.2%)
合計	309

表3 調査対象者の年齢 人(%)

	男性	女性	全体
65歳-69歳	9(11.3%)	28(12.2%)	37(12.0%)
70歳-74歳	21(26.3%)	84(36.7%)	105(34.0%)
75歳-79歳	23(28.5%)	61(26.6%)	84(27.2%)
80歳-84歳	19(23.8%)	37(16.2%)	56(18.1%)
85歳-89歳	5(6.3%)	17(7.4%)	22(7.1%)
90歳-	3(3.8%)	2(0.9%)	5(1.6%)
合計	80	229	309

調査対象者の年齢を表3に挙げている。70歳以上のものが88.0%と、9割近くを占めている。平均年齢は全体で75.96歳、男性の平均年齢は76.85歳、女性の平均年齢は75.65歳となっている。最高齢は明治32年2月生まれの93歳、最年少は大正15年9月生まれの66歳であった。

図1は、調査対象者の生年月日より算出した小学校入学と卒業の年代分布を示している。これによれば、調査対象者の大半は、大正5年(1916年)頃から昭和10年(1935年)頃までに小学校生活を送っていたと推定される。

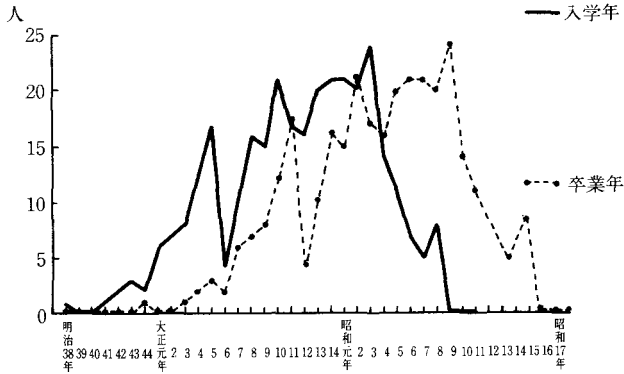


図1 小学校入学年と卒業年

2. 出身地と居住地域

表4は、調査対象者が小学生の頃に居住していた地域を県別に示してい

表4 小学生の頃居住していた県 人(%)

	男	性	女	性	全	体
広島県	25		72		97	(31.4%)
香川県	23		43		66	(21.4%)
岡山県	14		36		50	(16.2%)
愛媛県	9		25		34	(11.0%)
山口県	5		20		25	(8.1%)
島根県	4		10		14	(4.5%)
鳥取県	0		9		9	(2.9%)
徳島県	0		9		9	(2.9%)
高知県	0		5		5	(1.6%)
合計	80		229		309	

る。広島県が31.4%，香川県が21.4%，岡山県が16.2%，愛媛県が11.0%の順となっており，瀬戸内海側の県の出身者が約8割を占めている。平成3年度調査では，広島県，山口県，愛媛県など中国地方西部の出身者が約9割を占めていたが，今回の調査では，中国地方の東部西部それぞれほぼ半数ずつの割合となっている。

表5は，居住地域を種別に分けている。農村が約6割を占めており，漁村，山村を含めると全体の約8割が村落部に居住していた。また市街地の居住者は18.4%であり，村落部と市街地の割合は平成3年度調査とほぼ同じになっている。

表5 当時の居住地域 人(%)

農 村	188(60.8%)
漁 村	7(2.3%)
山 村	36(11.7%)
山 奥	8(2.6%)
島 嶼	9(2.9%)
市 街 地	57(18.4%)
無 回 答	4(1.3%)
合 計	309

3. 家族・世帯構成

表6は，小学校5，6年生頃の同居者について示している。本人を含め

表6 小学生の頃の同居者の種類と人数 人(%)

同 居 者	同 居 人 数	のべ人数	平均人数	のべ人数/同居人数
祖 父	87(28.2%)	87	0.28	1.00
祖 母	117(37.9%)	117	0.38	1.00
父	285(92.2%)	285	0.92	1.00
母	290(93.9%)	290	0.94	1.00
兄 弟	244(79.0%)	545	1.76	2.23
姉 妹	239(77.3%)	542	1.75	2.27
お じ	24(7.8%)	29	0.09	1.21
お ば	21(6.8%)	23	0.07	1.10
使 用 人	32(10.4%)	68	0.22	2.13
そ の 他	21(6.8%)	50	0.16	2.38
有効回答	309			

※複数回答

た世帯平均人数は7.59人で、この時期の水準から見ると、かなり世帯規模が大きい⁽²⁾。最大規模世帯は24人（内、使用人が15人）、最小規模世帯は2人であった。

家族構成について見ると、祖父母、父母、その子どもなど三世代以上が同居している家族は128世帯（41.4%）、夫婦とその子ども、もしくは夫婦片方とその子どもが同居している核家族は157世帯（50.8%）であった。この結果は、平成3年度調査での三世代以上同居家族42.5%、核家族52.9%とほぼ同じ構成比率になっている。

また、小学生当時、兄弟姉妹が同居していたのは286人（92.6%）で、兄弟姉妹が同居していなかった者は23人（7.4%）であった。兄弟姉妹が同居していた者については、その平均人数は3.81人であった。

表7は、調査対象者の兄弟姉妹の順位を示している。第一子が34.7%、第二子が22.0%、第三子が16.2%、第四子が12.3%となっている。平成3年度調査での第一子が28.9%、第二子が20.7%、第三子が17.8%、第四子17.2%と比較して、ほぼ同様の構成比率になっている。

表7 兄弟姉妹の順位 人(%)

第一子	107(34.7%)
第二子	68(22.0%)
第三子	50(16.2%)
第四子	38(12.3%)
第五子	23(7.4%)
第六子以下	23(7.4%)
合 計	309

4. 家庭の職業と経済状態

調査対象者の家庭の当時の職業を表8に示している。農業（専業）が54.7%と最も多く、商工業の16.5%、農業（兼業）の10.7%、勤め人の10.4%の順となっている。なお複数の職業を持つ世帯はすべて農業との兼業であった。平成3年度調査では専業および兼業の農業世帯は70.7%、商工業が24.7%（農業との兼業を含む）であり、ほぼ同様の構成比率となっている。

表8 家庭の職業 人(%)

農業(専業)	169(54.7%)
農業(兼業)	33(10.7%)
商工業	51(16.5%)
勤め人	32(10.4%)
漁業	4(1.3%)
林業	2(0.6%)
その他	15(4.8%)
無回答	3(1.0%)
合計	309

家族の中の働き手(稼ぎ手)を表9に示している。父、母、祖父、祖母、兄、姉の順で働き手を挙げている。1世帯あたりの働き手の平均人数は2.26人である。表10には、世帯の就業状況について見るために、父、母、その他の家族員に分けて就業状況を示している。ここでは、父母が働いていた世帯(30.2%)、父母とその他の家族が働いていた世帯(27.9%)、父のみが働いていた世帯(23.7%)の順に多くなっている。

表9 家族の働き手 人(%)

祖父	54(17.5%)
祖母	42(13.6%)
父	281(91.2%)
母	193(62.7%)
おじ	11(3.6%)
おば	9(2.9%)
兄	64(20.8%)
姉	30(9.7%)
その他	12(3.9%)
有効回答	308

※複数回答

表10 世帯の就業状況 世帯(%)

働き手	世帯数
父のみ	73(23.7%)
母のみ	7(2.4%)
父・母	93(30.2%)
父・母・その他	86(27.9%)
父・その他	29(9.4%)
母・その他	7(2.3%)
その他	13(4.2%)
有効回答	308

母親が働いている世帯は、全体の62.7%の193世帯だが、これと家の職業との関わりを見ると、表11に示しているように、農業世帯で母親の就業が多くなっている。また、兄または姉を働き手に挙げたのは74世帯(24.0%)であった。家の職業との関わりをみると、表12に示しているように、兄、姉が働き手となるのは、やはり農業世帯に多くなっている。

表11 農業世帯と母親の就業

人(%)

	農業世帯	非農業世帯	合計
母が働く	157(77.7%)	36(34.6%)	193
母が働いていない	45(22.3%)	68(65.4%)	113
有効回答	202	104	306

 $\chi^2=52.939$, $df=1$, $p<.0001$

表12 農業世帯と兄姉の就業

人(%)

	農業世帯	非農業世帯	合計
兄・姉が働く	62(30.7%)	12(11.5%)	74
兄・姉が働いていない	140(69.3%)	92(88.5%)	232
有効回答	202	104	306

 $\chi^2=13.738$, $df=1$, $p<.0001$

家の経済状態を近所と比較してどう感じていたかを表13に示している。「近所とほぼ同じ」という回答が48.6%で最も多いが、「裕福であった」もしくは「どちらかと言えば裕福であった」という裕福さを感じていた回答も37.2%を占めており、全体的に、平均以上の暮らしであると感じていた家庭が多数を占めている。

表13 家の経済状態

人(%)

裕福であった	51(16.5%)
どちらかと言えば裕福であった	64(20.7%)
近所とほぼ同じであった	149(48.2%)
どちらかと言えば裕福ではなかった	21(6.8%)
裕福ではなかった	21(6.8%)
有効回答	306

〔2〕食生活

1. 食事回数と摂取時刻

1日の食事回数を表14に示している。全体の約7割が3回、約3割が4回食事をしている。また、表15に家庭の職業と食事回数との関係を示している。農業世帯では、6割の家庭が3回、4割の家庭が4回以上の食事をとっているが、非農業世帯では圧倒的に3回の食事が多くなっている。

表14 1日の食事回数
人(%)

1回	0(0.0%)
2回	1(0.3%)
3回	214(69.3%)
4回	90(29.1%)
5回	4(1.3%)
合計	309

表15 農業世帯と食事回数 人(%)

	農業世帯	非農業世帯	合計
3回以下	122(60.4%)	93(86.9%)	215
4回・5回	80(39.6%)	14(13.1%)	94
有効回答	202	107	309

$$\chi^2=23.242, df=1, p<.0001$$

図2に食事回数別にその摂取時刻を示した。3回の場合、第1食が7時台、第2食が12時台、第3食が18時台から19時台に多く食事をとっている。4回の場合、第1食が6時台か7時台、第2食が10時台か12時台、第3食が15時台、第4食が19時台から20時台に多くとっている。1日の食事回数が3回の場合に比べて食事4回の場合、朝は早く、夜は遅く食事をとる傾向にある。また、4回の場合、回数のピークは5箇所あり、3回に比べ食事時間は一様ではない。

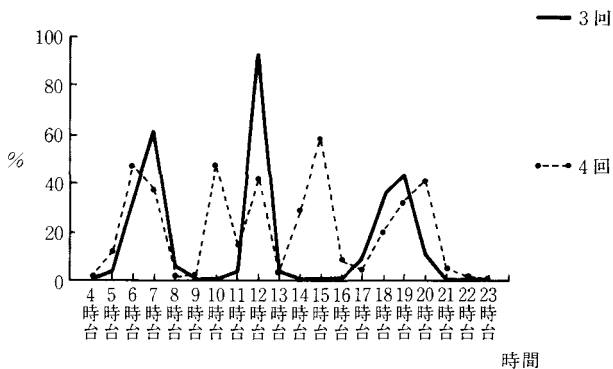


図2 1日の食事摂取時刻

2. 日常の食事内容

(1) 主食

主食の種類を食事別に示したのが表16である。全体的に見て、約7割の世帯が白米と麦を混ぜたご飯を食べていた。朝昼夕ともに白米のみのご飯

表16 主食の種類 人(%)

	朝食	昼食	夕食
白米のみ	58(18.8%)	59(19.1%)	62(20.1%)
麦のみ	8(2.6%)	9(2.9%)	6(1.9%)
白米・麦混合	223(72.1%)	199(64.4%)	223(72.1%)
芋・麺など	20(6.5%)	35(11.3%)	16(5.2%)
有効回答	309	302	307

を食べていた世帯は全体で51世帯(16.5%)であった。

家の職業と主食の種類との関わりをみるために、農業世帯と非農業世帯について、朝昼夕ともに白米のみ食べている家庭とそれ以外の家庭に分けて表17に示した。農業世帯では9割以上の大半の世帯が麦やその他の雑穀を混ぜたご飯を食べているのに対して、非農業世帯では「白米のみ」を食べる家庭が3割以上あり、やや多くなっている。

表17 農業世帯と主食の種類 人(%)

	農業世帯	非農業世帯	合計
白米のみ	16(7.9%)	35(32.7%)	51
その他	186(92.1%)	72(67.3%)	258
有効回答	202	107	309

$$\chi^2=31.192, df=1, p<.0001$$

ご飯に麦を混ぜる割合については、図3に示すように、3割程度麦を混ぜていた家庭がもっとも多く、5割、7割がこれに次いでいる。家庭の富裕度との関わりからみると、表18に示しているように、裕福に感じている

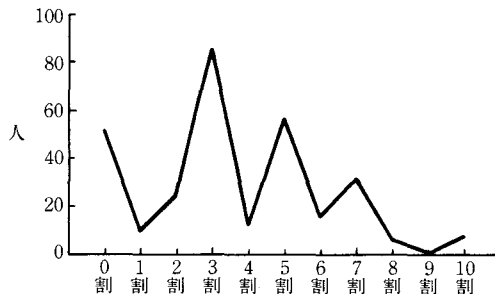


図3 麦の割合

表18 家庭の裕福度と麦の割合

	裕 福	平 均	裕福でない	全 体
0～3割	81(71.1%)	82(56.9%)	11(26.2%)	174
4～6割	26(22.8%)	38(26.4%)	17(40.5%)	81
7～10割	7(6.1%)	24(16.7%)	14(33.3%)	45
有効回答	114	144	42	300

$$\chi^2=29.934, df=4, p<.0001$$

家庭では、ご飯に混ぜる麦の割合が低くなっており、裕福でないと感じている家庭では、麦の割合が高くなっている。

表19は温かいご飯の摂取状況を示している。一日のうちで温かいご飯を食べたのは、朝食時が237人(79.5%)でもっとも多く、夕食時では187人(62.8%)となっている。また、毎食とも温かいご飯を食べていたのが39人(13.1%)、朝食と夕食が温かいご飯だったのが96人(32.2%)で、合わせて半数近くあるが、残りの半数以上である160人(朝食のみ;102人, 昼食のみ;9人, 夕食のみ;49人)は1日に1度しか温かいご飯を食べていないという回答であった。母親の就業と温かいご飯の摂取状況との関係を見てみると、表20に示すように、母親が就業している家庭では、温かいご飯を1日に1回しか食べない家庭の割合が多くなっている。

表19 温かいご飯の摂取状況 人(%)

朝 食	237(79.5%)
昼 食	51(17.1%)
夕 食	187(62.8%)
有効回答	298

※複数回答

表20 母親の就業と温かいご飯の摂取回数

	母親が就業	母親が就業していない	合 計
1日1回	119(63.6%)	41(36.9%)	160
1日2回以上	68(36.4%)	70(63.1%)	138
有効回答	187	111	298

$$\chi^2=19.970, df=1, p<.0001$$

(2) 副食

平成3年度調査で副食の中心を占めていた味噌汁と漬物について、食事毎の摂取状況を調べ、表21と表22に示している。味噌汁は朝食で約8割、夕食で約4割がとっている。また漬物は朝食で約9割、昼食と夕食で約8割がとっており、どちらも毎日の食事に欠かすことのできない副食であった。また、味噌汁、漬物を含めた副食の平均品数は、朝食が2.10品、夕食が2.84品となっている。多く摂取していた副食の種類については表23のようになっており、朝食は味噌汁と漬物を中心とした構成、夕食は漬物、野菜類、魚類を中心とした構成になっている。

表21 味噌汁の摂取状況 人(%)

朝食	256(82.8%)
昼食	47(15.2%)
夕食	135(43.7%)
殆どなし	11(3.6%)
有効回答	309

※複数回答

表22 漬物類の摂取状況 人(%)

朝食	292(94.5%)
昼食	239(77.3%)
夕食	264(85.4%)
殆どなし	3(0.9%)
有効回答	309

※複数回答

表23 副食の摂取状況 人(%)

	朝食	夕食
味噌汁	256(82.8%)	135(43.7%)
漬物	292(94.5%)	264(85.4%)
野菜類	58(18.8%)	227(73.5%)
魚類	34(11.0%)	193(62.5%)
肉類	0(0.0%)	17(5.5%)
その他	36(11.7%)	25(8.1%)
有効回答	305	299

※複数回答

副食の素材として多く挙げられたものを表24にまとめているが、全体として、季節の野菜(特に芋類と大根)、豆腐、油揚げなどの大豆加工品、海藻類などが多くみられる。豆腐、海藻類は味噌汁の具として多く用いられている。また、夕食の副食として挙げられた魚類は、鯖、鰯などが多くなっている。

表24 副食の素材

(人)

	朝 食	夕 食
野菜類	大根(94)芋(76)葱(37) 茄子(25)人参(18)青菜(16) 玉葱(16)白菜(15)胡瓜(7) かぼちゃ(7)ごぼう(5)	芋(51)大根(48)茄子(17) 人参(15)かぼちゃ(12)葱(10) ごぼう(9)白菜(7)胡瓜(6) 青菜(5)蓮根(3)
豆腐類	豆腐(75)油揚げ(27)麩(15)	豆腐(19)油揚げ(8)麩(2)
海藻類	わかめ(32)昆布(2)のり(2)	昆布(7)わかめ(6)ひじき(2)
魚貝類	干物(11)小魚(8)焼き魚(1) 煮魚(1)しじみ(4) あさり(3)	焼き魚(14)干物(7)煮魚(5) 刺身(5)小魚(3)貝(3) 鯖(18)鰯(16)鰺(5)蛸(4) いか(4)
肉・卵	卵(4)肉(0)	肉(10)鶏肉(3)牛肉(3) 卵(2)豚肉(1)
豆類	味噌(2)もろみ(1)煮豆(1)	味噌(1)もろみ(1)ひしお(1)
漬物類	沢庵(12)らっきょう(4)	沢庵(4)梅干し(2)

※複数回答

(3) 間食と好物

表25に示すように、間食として多く食べられていたものは、果物、芋、かき餅や煎餅、豆などである。果物では、柿(97)、みかん(48)、いちじく(33)、栗(25)などが多く挙げられた。芋はさつまいものふかしたも

表25 間食の種類 人

芋類	106
豆類	51
果物	323
餅・煎餅類	92
飴	30
饅頭	10
駄菓子	9
ビスケット	6
パン	6
キャラメル	5
なし	14
有効回答	294

※のべ人数

表26 好物だったもの 人

魚類	95
芋類	45
肉類	40
野菜類	38
すし	35
卵	27
果物	25
餅類	24
うどん・素麺	21
漬物	19
豆類	16
おはぎ	12
米	9
味噌汁	9
蒲鉾	7
有効回答	282

※複数回答

の、豆は大豆や空豆の煎ったものが大半である。

当時好物だったものを尋ねたが、表26のように魚類がもっとも多く挙げられた。干し魚や小魚類は少なく、多くが焼き魚や煮魚であった。その他、芋類や野菜などの日常食、肉類やすし、餅類などの行事食も多く挙げられている。

(4) 飲物

日常の飲物については表27の通り、お茶が多く飲まれている。また、飲み水の水源は表28に示しているように、自家用井戸からが68.5%と最も多く、次いで山水からの14.9%、共同井戸からの11.4%となっている。

表27 日常の飲物の種類 人(%)

お茶	281(90.9%)
白湯(湯ざまし)	37(12.0%)
生水	121(39.2%)
ラムネ	79(25.6%)
牛乳	20(6.5%)
その他	20(6.5%)
有効回答	309

※複数回答

表28 飲み水の水源 人(%)

自家用井戸	211(68.5%)
山水	46(14.9%)
共同井戸	35(11.4%)
水道	26(8.4%)
川	13(4.2%)
谷水	11(3.6%)
その他	1(0.3%)
有効回答	308

※複数回答

(5) 食卓の形態と食事の雰囲気

食卓の種類を表29に示している。箱膳が44.5%、茶ぶ台が38.0%とほぼ同じ割合でかなり見られ、テーブル、いろり端で食事をとっていた人は全体的に少なくなっている。

表29 食卓の種類 人(%)

箱膳	137(44.5%)
茶ぶ台	117(38.0%)
テーブル	44(14.3%)
いろり端	23(7.5%)
その他	6(1.9%)
有効回答	308

※複数回答

大正から昭和にかけての時期は、箱膳から茶ぶ台への移行期とみなされているが、⁽³⁾ここではその変化がどのように読み取れるだろうか。箱膳で食事をしたと回答した人の平均年齢が77.04歳であるのに対し、茶ぶ台は74.97歳で少し年齢が若くなっているが、大きな差はない。また、茶ぶ台の登場は、小規模な核家族世帯の増加、家族一緒の水入らずの食事風景と関連づけられているが、本調査では、箱膳世帯と茶ぶ台世帯とでは、家族規模や構成に関しても、次の項にある食事形態に関しても大きな差は見られなかった。⁽⁴⁾

表30に見られるように、食事は家族全員でとっていた家庭が圧倒的に多く、全体の92.6%となっている。なお、家族の一部で食事をとっていたとする22人の家庭の職業をみると、商工業世帯が11人であり、家業の事情による場合が多いように思われる。

当時の食事の雰囲気や様子について、表31に示している。食事について、

表30 食事の形態 人(%)

家族全員で	286(92.6%)
家族の一部で	22(7.1%)
無回答	1(0.3%)
合計	309

表31 食事の雰囲気 人(%)

楽しかった	211(68.5%)
楽しくなかった	15(4.9%)
満足していた	211(68.5%)
満足していなかった	26(8.4%)
にぎやかだった	161(52.3%)
静かだった	86(27.9%)
慌ただしく食べた	64(20.8%)
落ち着いて食べた	137(44.5%)
お腹がすいていた	80(26.0%)
食事の時間が待ち遠しかった	104(33.8%)
おしゃべりをしながら食べた	95(30.8%)
父母の話聞きながら食べた	141(45.8%)
おかずは各自の皿に別々に盛られていた	204(66.2%)
有効回答	308

※複数回答

「楽しかった」「満足していた」「にぎやかだった」という回答が、いずれも多くなっている。「楽しかった」「満足していた」の両方ともに回答を得たのが163人(52.9%)であり、半数以上の方は、子どもの頃の食事の満足度を高く評価しているようである。また、「おかずが各自別々に盛られていた」も、高い割合を示している。

3. 特別食・行事食

表32は、各行事毎に食べたごちそうとして記憶に残っているものを挙げてもらった結果である。花見は、無回答がとりわけ多かったが、「1年のうちで一番のごちそう」という回答もあり、地域や家庭による差があると思われる。

表32 各季節行事のごちそう (人)

行事	ごちそうの種類
正月	餅(117)雑煮(98)おせち料理～数の子・黒豆・煮しめなど(69)魚～鱒・鯛・鱈など(24)すし(12)肉(5)白米(4)すき焼き(3)赤飯(以下各1)混ぜご飯、茶碗蒸し、豆腐、貝、芋餅、無回答(6)
節句	すし(92)餅(33)柏餅(30)赤飯(18)ちまき(16)団子(15)蓬餅(14)蒲鉾(9)菱餅(9)あられ(8)ようかん(5)弁当(6)甘酒(5)柴餅(5)煮しめ(4)豆(4)混ぜご飯(3)白酒(3)魚(3)てんぷら(3)卵焼き(3)その他(11)なし(6)無回答(52)
花見	すし(131)弁当(22)卵焼き(10)おむすび(8)団子(7)餅(6)蒲鉾(6)ようかん(5)煮しめ(4)てんぷら(2)あられ(2)酒(2)甘酒(以下各1)白米、肉、鯨肉、饅頭、飴、菓子、寒天、唐揚げ、きんぴら、なし(28)無回答(98)
盆	素麺(77)団子(60)ぼた餅(28)うどん(21)すし(21)精進料理(17)魚(9)赤飯(8)柏餅(8)果物～水瓜・桃・葡萄(7)餅(6)水瓜(5)柴餅(5)白米(3)てんぷら(2)肉(2)枝豆(2)その他(12)無回答(40)
祭	すし(182)魚(48)餅(22)てんぷら(14)赤飯(12)甘酒(10)煮しめ(10)うどん(9)肉(7)蒲鉾(6)ぼた餅(3)卵焼き(3)ようかん(3)豆腐(3)白米(2)素麺(2)松茸(2)蟹(2)その他(11)無回答(25)
彼岸	おはぎ(169)餅(62)団子(59)すし(9)精進料理(6)赤飯(5)魚(2)素麺(2)蒲鉾(以下各1)うどん、あられ、菓子、揚げ物、卵、おりょうぐ、なし(6)無回答(31)

※複数回答

行事別に見ると、正月では、「餅、雑煮、おせち料理」、節句では「すし、餅、柏餅」、花見では、「すし」、盆では「素麺、団子」、祭りでは「すし」、

彼岸では「おはぎ、もち」が代表的な行事食として多く挙げられていた。

全体的には、行事食の代表的なものは「すし」で、節句、花見、祭の行事でもっとも多く挙げられ、その他の行事でもすべて上位5位以内にはいっている。正月や彼岸など、すしがそれほど多く挙げられていない行事では、餅や団子類が多くなっている。

〔3〕住生活

1. 住居の形態と規模

調査対象者が当時住んでいた住居は、表33に示されているように、一戸建て(平屋、二階建て)が97.1%と大半で、平成3年度調査の97.8%とほぼ同じになっている。

1戸あたりの部屋数を表34に示している。4部屋が28.2%と最も多く、次いで5部屋の23.6%、6部屋の14.2%であり、1戸あたりの平均部屋数は5.4部屋であった。

表33 住居形態 人(%)

一戸建(平屋)	238(77.0%)
一戸建(二階建)	62(20.1%)
共同住宅	9(2.9%)
合計	309

表34 部屋数 人(%)

1部屋	1(0.3%)
2部屋	7(2.3%)
3部屋	26(8.4%)
4部屋	87(28.2%)
5部屋	73(23.6%)
6部屋	44(14.2%)
7部屋	33(10.7%)
8部屋	15(4.9%)
9部屋	8(2.6%)
10部屋以上	13(4.2%)
無回答	2(0.6%)
合計	309

2. 住居設備・備品

住居内外の諸設備・備品の保有状況を表35に示している。

屋内の設備では、かまどの設置率が91.9%と高い。いろりを設置している家は100(33.0%)で、そのうちかまども設けている家は96あり、いろりのある家のほとんどがかまどを備えていた。また、仏壇や神棚の所持率も

表35 住居設備・備品の保有状況

設備・備品	保有世帯数 (保有率:%)	階層別保有状況 階層別保有世帯数(階層内保有率:%)		
		裕 福	平 均	裕福でない
かまど	284(91.9)	110(95.7)	137(91.9)	37(88.1)
仏壇	278(90.0)	109(94.8)	131(87.9)	38(90.5)
時計	277(89.6)	111(96.5)	128(85.9)	38(90.5)
神棚	244(79.0)	98(85.2)	118(79.2)	28(66.7)
庭	234(75.7)	101(87.8)	102(68.5)	31(73.8)
井戸	221(71.5)	87(75.7)	106(71.1)	28(66.7)
瓦屋根	192(62.1)	90(78.3)	86(57.7)	16(38.1)
両親の部屋	163(52.8)	76(66.1)	70(47.0)	17(40.5)
自転車	156(50.5)	72(62.6)	70(47.0)	14(33.3)
自分の勉強机	146(47.2)	74(64.3)	61(40.9)	11(26.2)
廊下	140(45.3)	75(65.2)	55(36.9)	10(23.8)
ガラス窓	134(43.4)	67(58.3)	56(37.6)	11(26.2)
垣根	113(36.6)	52(45.2)	52(34.9)	9(21.4)
藁葺き屋根	102(33.0)	27(23.5)	56(37.6)	19(45.2)
いり	102(33.0)	40(34.8)	45(30.2)	17(40.5)
倉	100(32.4)	58(50.4)	35(23.5)	7(16.7)
ラジオ	93(30.0)	46(40.0)	37(24.8)	10(23.8)
塀	91(29.4)	50(43.5)	33(22.1)	8(19.0)
椅子	88(28.5)	49(42.6)	35(23.5)	4(9.5)
門	65(21.0)	38(33.0)	23(15.4)	4(9.5)
自分の部屋	54(17.5)	30(26.1)	21(14.1)	3(7.1)
茅葺き屋根	40(12.9)	16(13.9)	17(11.4)	7(16.7)
有効回答	309	115	149	42

※複数回答

高く、両方を置く家は221(71.5%)で、ほとんどの家が日常の礼拝の場を備えていた。時計がほとんどの家にもあったのに対し、ラジオや椅子の保有率は低くなっている。また、両親の部屋は半分以上の家にあるが、独立して自分の部屋を持っている子どもは少なかった⁽⁵⁾。屋根は瓦屋根が62.1%と多くなっており、藁葺き、茅葺きの屋根は45.9%である。

屋外の設備については、庭があり、井戸を備えている家庭が多くなっている。垣根ないしは塀を設けていた家は159(51.5%)で、半数以上あった。

また、表35では裕福度で分けた三つの階層毎の設備・備品の保有状況も示している。各階層毎の保有率で比較した結果⁽⁷⁾、裕福度な階層ほど保有率が高くなるものとして、特に廊下、倉、瓦屋根、自分の勉強机、椅子、ガ

ラス窓、塀、門などが挙げられるのに対し、裕福度な階層ほど保有率が低くなるものとしては、藁葺き屋根が挙げられ、これらについては、経済的要因がその保有状況に与えていた影響が大きかったと考えられる。階層毎の保有率にあまり差がみられないのは、茅葺き屋根、井戸、いろり、かまど、仏壇などであるが、これらのうち全体的に保有率が非常に高いかまど、仏壇は必需品的色彩が強く、茅葺き屋根、いろりなどの保有率が低いものについては、地域的要因など、経済的要因以外の背景を考える必要があろう。

3. 照明・燃料・暖房

使用していた照明の種類について表36に示している。電灯が7割を占めており、ランプを使用していたのは4割であった。また、電灯とその他の照明を併用していたのは53人(17.2%)であった。

自宅に電灯がついた年について回答を得たのは174人で、その内訳を見ると、明治期が2人、大正期が115人(66.1%)、昭和期が57人(32.8%)であった。表37に示すように、大正から昭和5年にかけて、電灯の普及が進展した様子が認められる。

表36 照明の種類 人(%)

ランプ	126(40.9%)
電灯	216(70.1%)
ろうそく	18(5.8%)
カンテラ	21(6.8%)
その他	4(1.3%)
有効回答	308

※複数回答

表37 電灯の普及年 人

明治(43, 44)	2
大正 1-5	24
6-10	45
11-15	46
昭和 1-5	30
6-10	9
11-15	3
16-20	3
21-	12
有効回答	174

表38は、風呂や炊事に用いられていた燃料の種類を示しているが、最も多く使われていたのは薪で、その他、小枝や松葉、炭などが使われている。

表39は、当時用いられていた暖房設備を示しているが、火鉢を使っていたのが約7割、掘りごたつが約5割、湯たんぼ約4割、あんか約3割で、複数併用する家庭が多くなっている。

表38 燃料の種類 人(%)

薪	273(88.9%)
小枝	96(31.3%)
松葉	81(26.4%)
炭	73(23.8%)
麦わら	36(11.7%)
わら	25(8.1%)
もみがら	21(6.8%)
練炭	18(5.9%)
その他	10(3.3%)
有効回答	307

※複数回答

表39 暖房の設備 人(%)

火鉢	219(71.1%)
掘ごたつ	150(48.9%)
湯たんぼ	130(42.2%)
あんか	89(29.0%)
いろり	82(26.6%)
石油ストーブ	3(1.0%)
電気ストーブ	1(0.3%)
その他	33(10.7%)
有効回答	308

※複数回答

4. 衛生設備

(1) 便所

便所が母屋の中にあっただかどうかについては、表40のように母屋内にあったのが31.7%、母屋外が60.5%、両方あったのが7.8%であった。平成3年度調査での母屋内が31.8%、母屋外が60.2%という数字同じ割合になっている。また、農業世帯と非農業世帯を比較すると、表41に示しているように、非農業世帯では母屋外より母屋内、農業世帯では母屋内よりも母屋の外に便所を設置することが多くなっている。

表40 便所の位置 人(%)

母屋内	98(31.7%)
母屋外	187(60.5%)
両方	24(7.8%)
合計	309

表41 農業世帯と便所の位置 人(%)

	農業世帯	非農業世帯	合計
母屋内	41(21.9%)	57(58.1%)	98
母屋外	146(78.1%)	41(41.9%)	187
有効回答	187	98	285

 $\chi^2=35.837$, $df=1$, $p<.0001$

(2) 風呂

自家風呂があったのは85.8%、なかったのは14.2%で、平成3年度調査の83.9%、15.5%と同じ結果になっている。

自家風呂のあった世帯について風呂がどこにあったかを尋ねたところ、表42のように、約6割が母屋外に風呂があったと回答している。自家風呂のない世帯については、表43のように、68.3%が銭湯や共同浴場を利用し

表42 風呂の位置 人(%)

母屋内	101(38.7%)
母屋外	158(60.5%)
両方	2(0.8%)
有効回答	261

表43 風呂のない家庭の入浴 人(%)

他家でもらい風呂	12(29.3%)
銭湯	23(56.1%)
共同浴場	5(12.2%)
その他	1(2.4%)
有効回答	41

ており、29.3%が他家でもらい風呂をしている。自家風呂のない44世帯のうち、43.2%にあたる19世帯は市街地に居住する世帯であった。

表44には週の入浴回数を示している。これによれば、毎日風呂に入っていたのが約半数の46.8%であった。平均入浴回数は4.99回で、平成3年度調査とほぼ同じである。表45には、風呂の有無と入浴回数の関係を示している。これによれば、風呂が設置されている家庭では、約半数が毎日入浴しているが、風呂のない家庭では毎日風呂に入ることが少なくなっている。

表44 週の入浴回数 人(%)

1回	14(4.6%)
2回	26(8.5%)
3回	70(23.0%)
4回	28(9.2%)
5回	11(3.6%)
6回	13(4.3%)
7回	143(46.8%)
有効回答	305

表45 風呂の有無と週の入浴回数 人(%)

	風呂あり	風呂なし	合計
6回以下	134(50.6%)	33(75.0%)	167
毎日	131(49.4%)	11(25.0%)	142
有効回答	265	44	309

$$\chi^2=8.114, df=1, p<.005$$

5. 就寝場所と寝具

子どもの頃の就寝場所を尋ねたところ、表46のような回答を得た。自室

表46 就寝の場所 人(%)

居間	100(35.6%)
父母の部屋	60(19.5%)
自室	47(15.3%)
寝屋	31(10.1%)
納戸	26(8.5%)
祖父母の部屋	19(6.2%)
その他	26(8.5%)
有効回答	307

※複数回答

で就寝した人は15.3%と少なく、居間(35.6%)がもっとも多くなっている。その他、父母の部屋、寝屋、納戸などで就寝する場合も見られる。

寝具については夏と冬に分けて何を用いたかを尋ね、結果を表47に示している。冬はほとんど布団が用いられており、毛布(41)やこたつ(13)などをさらに加えて暖かくしている場合も見られる。夏は布団の他に薄い布やタオル(8)、ござ(22)などを用いる場合もあり、蚊帳(51)もかなり使われている。

表47 寝具の種類

	種 類	人(%)	内 訳(人)
夏	布団のみ	202(65.4%)	
	布 団・ その他	50(16.2%)	蚊帳(34)ござ(7)タオルケット(3) 毛布(2)着物(1)蚊帳・ござ(1) ござ・タオルケット(1) 蚊帳・タオルケット(1)
	そ の 他	33(10.7%)	ござ(9)蚊帳(9)毛布(5)布(2) タオルケット(1)蚊帳・タオルケット(3) 蚊帳・ござ(2)ござ・着物(1) 蚊帳・ござ・毛布(1)
	な し	3(1.0%)	
	無 回 答	21(6.8%)	
	合 計	309	
冬	布団のみ	228(73.8%)	
	布 団・ その他	53(17.2%)	毛布(38)こたつ(6)湯たんぽ(4) あんか(1)夜着(2)毛布・湯たんぽ(1) ござ・むしろ(1)
	そ の 他	12(3.9%)	こたつ(7)毛布(2)湯たんぽ(1) 夜着(2)
	無 回 答	16(5.2%)	
	合 計	309	

6. 家畜の飼育

家畜を飼育している世帯は全体の約8割で、家畜の種類とそれぞれを飼育している世帯の割合は表48の通りである。家畜を買っている家庭の74.8%が農業世帯であった。

表48 家畜の種類 人(%)

鶏	190(64.2%)
牛	154(52.0%)
馬	24(8.1%)
山 羊	14(4.7%)
豚	11(3.7%)
そ の 他	28(9.5%)
な し	62(20.9%)
有効回答	296

※複数回答

〔4〕衣生活

1. 日常着

(1) 種 類

日常着の種類を夏と冬に分け、男女別に示したのが表49である。

表49 日常着の種類(男女別) 人(%)

	男 子		女 子	
	夏	冬	夏	冬
着 物	37 (46.3%)	41 (51.3%)	134(58.5%)	161(73.8%)
洋服{学生服}	33{8}(41.3%)	24{8}(30.0%)	63(27.5%)	42(18.3%)
着物・洋服{学生服}	1 (1.3%)	2{2}(2.5%)	10(4.4%)	6(2.6%)
もんぺ	1 (1.3%)	1 (1.3%)	5(2.2%)	4(1.7%)
着物・もんぺ	0 (0.0%)	1 (1.3%)	3(1.3%)	4(1.7%)
洋服・もんぺ	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0(0.0%)	1(0.4%)
着物・洋服・もんぺ	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1(0.4%)	0(0.0%)
下 着	1 (1.3%)	0 (0.0%)	1(0.4%)	1(0.4%)
そ の 他	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2(0.8%)	1(0.4%)
無 回 答	7 (8.6%)	11 (13.8%)	10(4.4%)	9(3.9%)
合 計	80	80	229	229

平成3年度調査においても認められたように、全体的に着物を着ていた割合が高くなっているが、性別では女子より男子に洋服着用率が高く、季節的には、冬より夏に洋服が多く着られている。夏は洋服を着ているが、冬は和服を着るというパターンをとるのが、男子では6人、女子では25人おり、季節に応じて和洋を使い分けている。しかし、男子は25人、女子は48人が、夏冬ともに洋服を着用しており、部分的には洋服の着用が習慣化していたようである。この年間を通して洋服を着用していたグループを居住

地域との関わりで見ると、表50に示すように、それ以外のグループに比べ市街地域の居住者の割合が多くなっている。

表50 居住地域と洋服の着用 人(%)

	市 街 地	その他の地域	合 計
1年を通じて洋服着用	24(42.1%)	44(17.7%)	68
それ以外	33(57.9%)	204(82.3%)	237
合 計	57	248	305

(2) 枚 数

日常着の枚数については、表51に示している。男子の場合は、2組ないし3組持っていた人が62.5%と多くなっている。女子の場合は、2組ないし3組が42.3%で、やはり少なくないが、5組以上持っていた人の割合も35.4%あり、所持数にばらつきが見られる。枚数の多寡と家庭の富裕度については、顕著な関係は見られなかった。

表51 日常着の枚数 人(%)

	男 子	女 子
1組	3(3.8%)	4(1.7%)
2組	22(27.5%)	36(15.7%)
3組	28(35.0%)	61(26.6%)
4組	7(8.8%)	22(9.6%)
5組以上	11(13.8%)	81(35.4%)
無回答	9(11.3%)	25(10.9%)
合 計	80	229

表52 就寝着の種類(男女別) 人(%)

	男 子		女 子	
	夏	冬	夏	冬
着 物	49(61.3%)	59(73.8%)	192(83.8%)	199(86.9%)
洋 服	6(7.5%)	3(3.8%)	9(3.9%)	7(3.1%)
着物・洋服	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1(0.4%)
下 着	6(7.5%)	3(3.8%)	5(2.2%)	3(1.3%)
着物・下着	1(1.3%)	1(1.3%)	0(0.0%)	0(0.0%)
洋服・下着	2(2.5%)	0(0.0%)	1(0.4%)	2(0.8%)
な し	5(6.3%)	2(2.5%)	5(2.2%)	0(0.0%)
無 回 答	11(13.8%)	12(15.0%)	17(7.4%)	17(7.4%)
合 計	80	80	229	229

(3) 就寝着

就寝着については、夏と冬に分け、男女別に表52にまとめた。やはり、和式の着物(浴衣)がほとんどで、日常着に比べて洋式の占める比率は小さい。また、下着で寝たという回答も若干見られた。

(4) 下着

下着については、表53と表54に男女それぞれの種類を示している。日常着に比べて、下着は和式のものが相対的に少なくなっている。特に、男子は上衣、下衣とも洋式の方が多くなっており、女子も下衣は洋式の方が多くなっている。

表53 下着の種類(男子)

人

上衣	シャツ	53	下衣	パンツ	46
	襦袢	15		ふんどし	16
	なし	3		ももひき	17
				なし	3
有効回答		71	有効回答		74

表54 下着の種類(女子)

人

上衣	襦袢	94	下衣	パンツ・ズロース	103
	シャツ	57		腰巻き	78
	シュミーズ	27		ももひき	4
	スリッパ	3		ペチコート	1
	なし	8		ブルマー	1
有効回答		182	有効回答		180

2. 衣服の新調と晴れ着

平成3年度調査で、衣服の新調の頻度について調べたが、ときどき新調してもらったという回答が半数以上あった。今回の調査では、衣服を新調または購入してもらうのは具体的にどういう時だったかを尋ねたが、表55のような結果を得た。全体的に見て、特別な行事のあるときに合わせて新調していたようである。特に正月と盆、正月と祭という組み合わせで、夏冬2回の新調の機会があると回答した人が多くなっている。学校行事に合わせて新調するという回答も若干見られた。

表55 衣服の新調の機会

				人	
季節的行事	正月	185	家庭の行事	旅行	3
	節句	1		結婚式	1
	田植え	1	誕生日	2	
	七夕	1	そ の 他	季節毎に	8
	盆	66		必要に応じて	37
	祭	96		お金があるとき	2
		呉服屋が来たとき		2	
学校行事	入学	15	普段から	3	
	進学	2	決まっていなかった	4	
	新学期	6	新調の機会はなかった	9	
	遠足	4	無回答	22	
	運動会	2			
	修学旅行	1			
	卒業	5			
	その他の行事	5			

正月などに晴れ着を着たかどうかについては、着た人が209人（男子39人；女子170人）、着なかった人が88人（男子37人；女子51人）で、全体の70.4%が晴れ着を着た経験を持っていた。男女別では、晴れ着を着たのが男子51.3%、女子76.9%で、女子の方の割合が高くなっている。

3. 履き物

日常の履き物については、表56に示している。全体として、和式の履き物が主であり、男女の差はあまり見られなかった。

表56 日常の履き物の種類

	人		(%)
	男	子	全 体
下 駄	52(65.8%)	161(71.9%)	213(70.3%)
草 履	38(48.1%)	98(43.8%)	136(44.9%)
わら草履	32(40.5%)	80(35.7%)	112(37.0%)
ゴム靴	15(19.0%)	48(21.4%)	63(20.8%)
運動靴(布)	13(16.5%)	46(20.5%)	59(19.5%)
ゴム長靴	7(8.9%)	27(12.1%)	34(11.2%)
わらじ	7(8.9%)	20(8.9%)	27(8.9%)
そ の 他	2(2.5%)	16(7.1%)	18(5.9%)
有効回答	79	224	303

※複数回答

IV. お わ り に

以上のように、衣・食・住の各項目について示してきた調査結果は、平

成3年度調査での結果と概ね一致しており、これを補足、強化するものとなった。衣・食・住の消費面においては、全般に質素で簡便な生活が維持され、家庭の労働の場としての機能が優先されていたことがうかがえる。特に農業世帯については、農業労働のあり方が家庭生活の細かな部分にまで影響を及ぼしている。生活の洋式化、充実化については、各家庭の裕福度や地域差が関係していると思われる。こうした生活環境に暮らす子どもの生活への満足感は、食生活において見る限り、低くはなかったと考えられるが、当時の子どもの生活意識については今後の検討課題としたい。

〈注〉

- (1) 末広菜穂子、石田美清「中国・四国地方における大正・昭和初期の子どもの生活(上)——家庭・学校生活に関する平成3年度調査——」『広島経済大学研究論集』第15巻第2号(1992年9月)、および、石田美清、末広菜穂子「中国・四国地方における大正・昭和初期の子どもの生活(下)——家庭・学校生活に関する平成3年度調査——」『広島経済大学研究論集』第15巻第4号(1993年3月)。
- (2) 大正9年の全国の平均世帯人員数は4.99人、本調査の対象としている中国・四国地方については、最大が島根県の4.97人、最小が山口県の4.47人である。総務庁統計局「国勢調査」。
- (3) 熊倉功夫「ちゃぶ台のある風景～食文化の移り変わり～」『週刊朝日百科日本の歴史』112号 p.11-50。
- (4) 箱膳世帯の世帯規模は7.64人、茶ぶ台世帯は7.32人である。核家族世帯の占める割合を見ると、箱膳世帯は59.1%、茶ぶ台世帯は64.1%となっている。また、箱膳世帯で家族一緒に食事をとったと答えたのは137人中128人(95.5%)、茶ぶ台世帯では117人中104人(88.9%)であった。
- (5) 各設備・備品の保有状況と、世帯の裕福度の関係を見るために、各設備・備品の保有世帯と非保有世帯について、裕福度で分けた三つの階層を説明要因とするクロス表を作成し、 χ^2 検定を行った。紙数の都合上、クロス表はここでは省略するが、有意な関係が認められる設備・備品項目についてその χ^2 値を付記しておく。
- (6) 外山知徳「子ども部屋の社会史」原ひろ子、阿部謹也他『家族——自立と転生』藤原書店、1991年、pp.95-107。
- (7) 表35の欄外参照。